

ことはできないからで、Hall は見通しとして、「これからの現代批評家は凡ゆる school のもっともすぐれた insights を総合するようになるだろう。また古典主義的な戯曲を理解するのにもっとも良い規準も浪漫主義的抒情詩を理解するのにもっとも適しているとは限らないことを悟るだろう」と言っている。(pp.174—176参照)

つまり幾つかの規準の組合せが総合的な判断の基準となるのであり、その批評の総体に新しい批評が加えられるとまた作品の評価に新しい秩序が生れるということになるであろう。(当然、我々は Eliot が作品と伝統との関係について述べたことを、批評の伝統としての有機体に思いを馳せることによって想起させられる。)

このような批評の態度の変化は、現代を批評の時代と言いながらも、「芸術は解説者よりも偉大である」と言うように、批評に限界のあることの自覚が強くなったことから来るのではないかと思われる。たとえば Daiches は、いくら批評の理論が発達し応用されて、作品を解明し、それに焦点をあて鑑賞力を増大させても、鑑賞は理論から独立できるという事実を指摘している。そして Bradley も言ったことであるが、分析のあとに依然として残る何ものかの在ることに注意している。批評家の仕事はそれを analogy や suggestion によって作品の多様な生命の姿をできる限り読者に示すことであるが、そのできる批評が effective criticism だというわけであり、それが批評による芸術の経験という機能なのである。

Hyman が結論的に理想的な批評と考えた批評は、plural, multiple, あるいは many leveled という形容詞をつけたものであるが、または continuum criticism と断言しよう。この連続体というのは、そこに全く個人的、主観的、個性的(無意識的)なものから、もっとも社会的、客観的、非個性的(歴史的)なものに至る凡ゆる可能な意味の場所を残しておこうという考え方から来ている。

Hyman はさらにこれに Jung の racial unconscious をつけ加えると、この continuum の両端がつながって一つの円が完成すると言っているが、やはりこれも一つの総合的な批評の考え方である。また私は、Hyman がこの結論を導き出すために、テーマの無い survey という形でなくて symposium という形の批評書のあり方や、学会、研究会のあり方を例として出して批評の進んでいる方向を示唆していることを興味深く思うものである。(The Armed Vision, pp.395—409参照)

Coleridge 以来総合ということが目標であったことを今思うわけであるが、まだこれは単なる多数とか複数とか無秩序ということではなく、全く dialectic な contest という形で進むべきものであろう。

(以上は昭和41年5月日本英文学会第38回大会におけるシンポジウム「現代における批評の問題」で序論的意味を持たせて担当した講演の内容である。)

な魔術的な能力で、我々はそれに専ら **Imagination** という名を支えた。この能力は、最初、意志と悟性によって活動させられるが、やがて静かで気がつかないけれども、きびしい統制の下におかれて、相反する或は不調和な諸性質の平衡乃至和解という形で自らの姿を現わす。即ち同一と相違、一般的なものと具体的なもの、珍らしさや新しさの感覚と古くて親しい対象、平凡でない感情と平凡でない秩序、常に覚醒している判断や落付いた自信と熱狂や深刻で激しい感情というようなものの和解の中に現われる」

Bradley は "**Poetry for Poetry's Sake**" の終りに近いところでこう言っている。「さてこれで言ふべきことは終ったのであるが、今までとは全く別な意味で、詩は何を意味するか、といふ問がなほ再び起ってくるであろう。他の何ものを以てしても置換不可能 (**cannot be replaced**) なるこのユニークな表現は、なほそれ自身を超えた何ものかを表現しようとするもののやうである。さうしてこのものはまた他の諸芸術や宗教や哲学が表現しようとしているものでもあるやうに感ぜられる。これが我々を駆り立てて徒労なまでも一方を他方に翻訳しようと努力させるのである。」(橋氏訳)

これは、**Richards** も彼の意味の分析のなかに含めようとしたところであるが、**Brooks** もまた **paraphrase** し得る内容乃至動機の合理的批判という形で包含しようとしたことである。しかし、これは実に困難な仕事なのであって、**Bradley** はさらに次のように言う。「最も優れた詩の周囲には(最も優れた詩のみに限らないが)無限なる暗示の雰囲気が揺曳する。詩人は一つのものについて我々に語りかける。併しこの一つのものの中にあらゆるものの秘密が潜んでゐるかのやうに思はれる。併し彼の言ふところはその言葉を遙かに越えて合図するかの如く、或は寧ろその言葉に於て焦点を見せてゐるところの無限なる或るものにまで拡がりゆくもののやうである。」

Blackmur の批評にも、学問的研究は必要であるけれどもそれが全てではない、という態度があるが、逆に、批評は絶対的なものではなく、固定観念に支配されるべきものでもない。即ち *modus vivendi* なのであって、いつでもそれ以上の発見の可能性を持つものであるという考えがある。(吉川道夫「**R. P. ブラックマー**」高橋編前掲書、pp. 147-158参照)ここから彼 **Blackmur** の批評の多様性と折衷性が出てくる。

Hart Crane 批判などに見られるように **Emerson** 的反理性主義を攻撃した **Yvor Winters** は内容と形式の均衡を理性的に評価しようとして論理性に重点をおいたけれども、彼が伝記的また社会的要素を考慮するのは、**Blackmur** が役に立つものは皆利用すべきであるとする態度とも同じであるが、それが批評の価値を決定するというのでないにしても、そのような学問的研究を背景にして、作品の本質に迫ろうとするもので、一つの総合的批評方法とすることができる。(吉川道夫「**アイヴァ・ウインターズ**」高橋編前掲書、pp. 181-182, 188参照)

Vernon Hall はさすがの **Cleanth Brooks** もその後幾分か総合的な態度を取るようになったと言っているが、極端に純粋な場合の **Brooks** の方法と対照的なものとして **Dante** の詩の僅か3行を批評したときの **Allen Tate** がありと凡ゆる学問を駆使した例を引いて、そうしなければ批評が満足に行われなかっただろうと言っている。現代までの永い多様な批評の歴史のあとでは、現代の批評家は到底一つの特定の **school** に身を置く

になることを目標にしたわけであるが、Dr. Johnson の時代は **specialist** になることに懐疑的な **neo-classicist** の態度が支配的であったのに対して、20世紀に入るとむしろ **one-sidedness** を恐れず、むしろ **superficial** なことを避けようとするに到った。(p. 14) 結局歴史的には **humanist** は極端な **sympathy** と、極端な **discipline** や **selection** のあいだを移動して、その両極端を結びつけようとするのに比例して **humanitarian** になったと Babbitt は言うのである。(p. 15) そして **humanitarian Rousseau** よりさらに思考と感情のあいだに調和を得た **Socrates**、人生を着実に眺めてしかもその全体を見る **Matthew Arnold**、極端は野蛮だと言う **Buddha** にその円満な姿を発見している。もし **pluralism** が極端にまで押し進められると、これ以上に **humane** でない、あるいは **humanistic** でないものは無いように思われるのであるが、同じような極端に走る **monism** はもっとも始末が悪いと Babbitt は言う。さらに彼は、人間精神が正気 (**sanity**) を維持しようと思うなら、この **monistic** な **unity** と **pluralism** との間の **balance** をしっかりと保たねばならないと考えていることは妥当適切なことであろう。

はじめに述べたように、**New Criticism** は科学に対して文学を守ろうとする立場を取っていたのであるが、詩を知識でなくて認識と考へ、詩の内部に科学を吸収するていの強力な何かを確立しようとするとき、逆に科学を利用することによって、即ち科学と和解することによって、これを成しとげようとし、また同時に科学の影響を強く受ける批評家も出たが、その例として **C. D. Lewis** や **I. A. Richards** をあげることができるであろう。**Lewis** はまた科学を克服した詩人として **Wordsworth** を、自らそのような科学を同化した詩人の例として **Edwin Muir**, **William Empson**, **Katharine Raine** の名をあげている。(The Poet's Way of Knowledge) また **Daiches** は **Shelley** や **Arnold** と同じように詩に高邁な運命を主張した **Richards** を称揚して、これに冷静な科学的研究者の名を与えている。

科学と文学の対立という二元論に先立つものとして小説家のなかから少し異った一例をあげれば、**George Eliot** の道徳的目的を達成するための **aesthetic teaching**、そしてそれによる **realities of existence** をつかんで **true pictures of human life** を描いた態度 (**Hoffmann and Hynes, English Literary Criticism: Romantic and Victorian**) があるし、また「文学は人生の現実の提示であるが、同時に芸術的信念の表現として論理的な技巧が必要である」(矢本貞幹「小説研究の方法」『英語文学世界』創刊号) という態度によって、**entertainment** と **morality** をともに棄てることなく芸術と道徳のあいだの **gap** を埋めた **Henry James** の方法もある。

Arnold や **Pater** の意味内容と表現形式の二元論もかなりはっきりした対立であるが、これらの融合はすでに **Coleridge** が試みたことは前にふれたとおりである。

Coleridge はたとえ中途半端に終わったとは云え、心理学、哲学、美学を総合しようとしたが、その *Biographia Literaria* の14章の一部を紹介してみよう。「詩人は理想的完成の状態と言うなら、人間の全靈魂を活動させる。その際その諸能力は相対的な価値と威厳に比例して相互に従属・依存しあっている。詩人は **unity** のある音調と精神を拡散させるが、それはまた互に混り合って謂わばお互の中に融けこむ。それを行なうのは総合的

Brooks の1951年に書いた“The Formalist Critic”(The Kenyon Review, as quoted in Hall, A Short History of Literary Criticism, p.174) には、「文学は究極的に metaphorical で symbolic である。一般的普遍的なものは抽象によっては捕えられないもので、具体的なもの、特殊的 (particular) なものによって到達される」とあるようにもっとも New Critic らしい純粋な形で自分の立場を説いたものであるが、

「文学批評はその対象 (文学作品) の description と evaluation である。

文学作品のなかの形式的諸関連は、論理的諸関連を含むことはあっても、それに優越するものである。

文学は宗教の代表者ではない。

Allen Tate の言うとおり、specific な道徳的問題は文学の subject-matter ではあっても、文学の目的は一つの道徳を指定 (point) することではない。」

と言うことによって、文学の autonomy を主張する。これによって Ruskin や Arnold らの19世紀の諸批評家を否定する意図はよく判るのであるが、さらに

「批評の第一の関心は unity の問題である。即ち、文学作品が形成する、あるいは形成し損う全体であり、この全体を作りあげる際の雑多な部分の相互に対する関係である。成功せる作品においては、形式と内容は分離できない。

形式は意味である。」

と言うとき、Coleridge の多面的な詩論が Brooks の場合、想像力のもとに強力にまとめられて、poetry と poem の一体化を進めて単純な一元論を目指していると言うこともできるのである。

私が言っている総合的批評の総合とは、このような狭義の unity を意味するのではなく、もっと大きなむしろ多元的なというような意味であり、私の理想から言えば、さらに unity と pluralism の総合というような意味で使いたいのである。

ここで私は再び Babbitt の主張を思い出したい。彼が humanism と humanitarianism とを区別したことは周知のことであるが、彼はまず ‘humanist’ という言葉の古い意味を考える。このローマ人にとって弾力性のある徳性は次第に用法が乱れて、ギリシャ人が philanthropy と呼ぶ「無差別の慈悲」を意味するに到った。しかしこの語は本当は doctrine と discipline を意味したわけで、本質的には democratic ではなくて aristocratic な含蓄を持つものであった。ここには、人間全体を考える態度と個人の完成という対立がある。従って humanist は好みが元来選択的であるが、同情と選択という対立を、Cicero は discipline and selective sympathy という形でまとめたけれども、彼は本質的には discipline と selection の humanist である。歴史的に見ればキリスト教の同情も同様に選択的であった。Humanistic で宗教的という英国の伝統の可能性もここにあったのであるが、英国の gentleman と学者の結合した人間像はアテネ時代の貴族的な democracy に似通うものがある。キリスト教に対して異教の doctrine と discipline が力をかけたことはカトリックとプロテスタントの両方の国々で見られたことでもある。(p.12) 近代に入る前の時点で考えると、後期ルネサンスの selective humanism と、もっと早い発展期のイタリアの individualism はともに「完全な人間」

p. 4), このような想像的経験は、読む人により、また読むたびに異なるものである。Bradley は “when we are reading as poetically as we can” という但し書きをつけ、I. A. Richards は “proper reading” という条件をつけてはいるが、趣味に基準がないように、詩の読み方の多様性について Bradley は「一つの詩作品の存在の仕方には無数の段階がある。併しこの如何ともなし難い事実は物事の本性に存在するものであって現在の我々とは無関係である」と言っている。Richards の考えた、「文学作品にはそのような読み方をゆるすだけでなく、要求する性質があることこそ、文学の良し悪しを判断する基準になる」とする着眼と一致するところである。(David Daiches, *Critical Approach to Literature* 及び橋口稔「ニュークリティシズムの教えるもの」正橋正雄編『ニュークリティシズム研究』p.203参照)

Bradley が「詩のための詩」という言葉を解釈して、第一にこの経験は自己目的であり、第二に詩的価値は内在的価値のみである。第三に、後来的、外在的 (ulterior) 目的を考慮することは詩的価値を低下させると言うとき、(第一の)「詩の本性は日常現実の世界の一部でもなく、またその模写でもあるべきではなくて、独立せる、完全なる、自律的な、それ自身による世界であるべきである」という原則は、Eliot がまず考えた文学の自律性の原則としてあったことである。また(第三の) ulterior ends という考え方も後年の Eliot が文学以外のところに目的を求めたことからすれば、その内容の質的相異は勿論考えるべきであるが、それほど驚くべきことではないとも言えるのである。

さかのぼって Coleridge の考えを見ると、imagination という能力について述べているなかで、「想像力が自然的なものと人工的なものとを blend して調和させているときでも、それは芸術を自然に、様式を実質に従属させる」と言うと同時に、また「想像力は我々の poet に関する賞讃を poetry との共感に従属させる」と言っている (*Biographia Literaria*, Ch. IX) のは、詩人よりも作品の分析という New Criticism の主張し実行したことと通じているわけである。

Bradley は「詩の主題 (subject) は詩の内側にあるのではなくて、詩の外側にある」と言い、これと対立するものは素材と形式から成る詩の形式ではなくて、実質と形式を持つ詩全体であると言っている。この実質と形式は、血液と血液中の生命が切り離せないように一つの unity を成していると言うとき、私は Coleridge のことと、Cleanth Brooks のことを思い出すのであるが、Coleridgeの方がはるかに大きな立場に立っているのは勿論である。彼の organic form の理論は、「存在の本質は matter でなくて process にある」ということであり、「芸術作品はそのような process の記録であり、その部分のあいだには、他の生命のあるものと同じような有機的な関係が存在する。従って作品は全体として判断されねばならないのであって、部分は批評のために恣意的に切り離されてはならない」ということになる。芸術作品を創造する精神の、この vital force が彼の言う Imagination であって、それはそれによって matter と form とが融合し生命を与えられるところの自然界の creative な process に照応するものである。ここから創造過程に関する18世紀的機械的理論でない、詩の存在論的な理論と詩作品の自律的な存在という現代の詩論の基礎が生れているわけである。

dom from affectation and wonders at nothing, whereas the romanticist……is prone to wonder at everything” (“What is Humanism,” *Literature and the American College*, p.14) と指摘しているところとまるで逆であると言えよう。

New Critics やその先駆者たちのなかでも Hulme や Eliot は人間の性質の根元を悪と考え、不完全であるから規律や節度によって秩序を保つ努力の必要なことを示唆しているけれども、必らずしもそれは彼等だけに限らず、浪漫主義者たちのなかにも見られることである。自然界に、普遍的な調和と秩序を持つ真理が美的永久の形を付与されるのを見た Wordsworth は、そのような状態に人間がなるのを理想としたのであるが、その時代の特徴たる「精神の偉大性」ということの背後には悪の認識が存在している。精神の偉大性はものを変性させる力の中に現われるばかりでなく、また精神がその到達する如何なるものにも甘んずることを拒絶することの中に、そして「つねに次に来らんとする或るもの」を追求することの中に、地上的経験の世界よりも遙かに広大な世界に属するという暗示の中に現れる。そしてここに存在する障害と制限とは悪なのであって、Wordsworth の樂觀主義は悪の無視にではなくて悪の事実そのものに基礎を置いていると言える。（橘忠衛訳、ブラッドリ「イギリスの詩とドイツの哲学」『詩のための詩他四篇』参照。Bradley の論文で岩波文庫同書に収められたものについては橘氏の訳文を多く利用させていただいた。）

Bradley は “The Sublime” のなかで、Wordsworth の同時代人として Schopenhauer と Hegel にふれている。Schopenhauer は、盲目意志は人間において意識的になるので、従って悪からの救済は結局は人間の力によるものとした。（これは晩年の *Dynast* における Hardy の自由意志への希望という変化を思わせるものがある。）また Hegel は神と人間を同一視したと非難されたわけであるが、彼は「悪の存在を認めるにも拘わらず、また悪が存在することによってさえ、事物の究極の意味が善であると信ずること」、また「事物の善を問題とする傾向を意味する」ということで樂觀主義と言えるが (p.104), 「人間は生れながらに 彼があるべきところのもの」でないという意味では悪である。「人間は彼の自然を組織すること、即ちそれを限定と否定とによって発展させること、障害と対決しそれを発展の道具に変形させること、そして彼の中に起ってくる道徳的悪を抑圧すること、これらのことによらなければ自分を善にすることができない。人間の自然は抑圧さるべく存在し、その他の如何なる理由のためにも存在しない」(p.179) というのが Bradley の言う、Wordsworth をさらに徹底させた Hegel の考え方の説明である。ここには人間の不完全さと、組織の必要さを説く Eliot はじめ New Critics に通じるものがかなりの程度現れていると言うことができる。

Bradley は浪漫主義的批評精神の頂点に立つ人であるが、彼の “Poetry for Poetry's Sake” のはじめに、本質としての poetry と、欠陥を持ちうる poems を区別し、「poetry には韻律形式が含まれていて、それは偶然や手段ではない」と念をおしている。また「poetry は具体的には poem として出てくるのであるから、我々は poem をそのあるがままの姿で考えなければならない、そして現実の詩作品は音、心象、思想、情緒等の諸経験の連続であると言えよう」と述べているが (*Oxford Lectures on Poetry*,

る人生の模倣でない社会的責任の遂行に当たった者と考え、自己の能力を意識し、新しい精神の世界を作るためにその能力を発揮する必要を感じた人々であると言っているが (p. 2), たしかにそのように浪漫主義者を性格づけることは永いあいだの常識であったと思う。

また20世紀の文学批評は Babbitt, Hulme, Eliot 以来、古典主義的であったことも同様に常識になっている。即ち New Criticism は浪漫主義に反撥して、古典主義的理論乃至人生態度を基盤として確立されたと言っても大過なかった。

しかしこの図式が必ずしも当らなくなっていることに New Criticism の出発以来の年月の経過を感じるとともに、文学批評の向うべき、自然的な理想の姿を反省すべき時期の到来と、その可能性を考えるものである。

Richard Foster は、New Criticism が Arnold の予言を実現しようとしているかの如くに、その当初から科学に対する弁証法的対立物として文学を取扱ってきたこと、また詩と想像力とに、伝統的に宗教に存在すると考えられてきたのと同じ力と価値を帰属させようとしたことを指摘し、さらに Arnold と同じように New Critics の大部分は社会的、宗教的原則において伝統主義者であり、正統主義者であるけれども、彼等の展開する詩の理論は、その humanism において romantic であり、また同時に mystique であると言っている。詩は理性や科学の考える知識よりさらに高次の認識を与えるという中心的原理は、まさに詩に形而上学や啓示の位置を与えるかに見えたからであるが、またさらに、animistic で、哲学的理想主義のひびきを持ち、神学や宗教の esoteric な述語や imagery を多く持ったその批評の用語は、反正統的な、romantic heresy にまつわりついていた、共同の責任感に照応するものがその理論の背後にあることを示している。(The New Romantics, p.32)

New Criticism はアメリカの南部を中心とした文学運動であったことから agrarianism は当然のこととして怪しまれないけれども、アメリカの南部ということから、まず政治におけるような保守主義が浪漫主義的なもの、詩的なもの、また humanism につながることは浪漫主義の本質の問題としても興味ある点であるが、たしかに単純な図式に納まりきれないものがあるということだけはできるようである。

たとえば John Keats は詩の Axiom の第一として "Poetry should surprise by a fine excess and not by Singularity—it should strike the Reader as a wording of his own highest thoughts, and appear almost a Remembrance" (To John Taylor, 27 Feb. <1818>) と言い、また "Poetry should be great and unobtrusive, a thing which enters into one's soul, and does not startle it or amaze it with itself, but with its subject" (To John Hamilton Reynolds, 3 Feb. 1818) と言っており、創作におけるその「驚き」という要素も十分に抑制されたものである。Milton に対する wonder を何回か表明するにしても、1919年には "Wonders are no wonders to me" (To John Taylor, 17 Nov. 1819) と言うほどになったのである。

これは Irving Babbitt が "<Neo-classicist> cultivates detachment and free-

総合的批評へ

福 間 欣 一

我々の住む世界を無機的世界、有機的世界、および倫理的価値の世界の三つに分類し、これを混同することから哲学をはじめとする学問の方法の誤りが生じると考えた Hulme から20世紀の批評が始まるとしても、アングロ・サクソンの性格はこのような峻別とは違ったところに特性があるのではあるまいかという感想を持つものである。

文学においては浪漫主義批判の形をとったその批評の中にも、Arnold や Pater の説いた所と必らずしも全面的に対立するばかりでない要素が発見されるだけでなく、Eliot の同時代人にも互に対立し合う批評が夫々かなりの力を持っていたことも注目に値する。Hulme 以来の血統をひく Eliot にしても文学批評の中に倫理的宗教的のみならず社会的態度をとりいれている。New Criticism の主張は余りにも単純に神話化されていたようである。固定した狭い規準に立つとき、さほど価値のないものを高く評価し、万人が愛する作品を無価値なものとして捨て去る危険があろう。

Murry, Read, Richards, Spender 等は思想こそ違っても社会的関心という共通点を持つことにおいて Eliot と同様である。革命、戦争、社会に対する関心は、倫理の客観的体系を必要とする意味で古典主義的であると同時にともともと浪漫主義的であろう。その意味で20世紀においては後期浪漫主義が失いかけていたものが復活したのだとも言えるであろう。浪漫主義は社会の外に出てしまったきりではなかった。ヒューマニズムも宗教との関係においてその内容は変化した。モダニズムの20世紀では、あらゆるものが新しいと同時に、戦争における Spender, 革命における Wordsworth の類似を連想するまでもなく、数世紀も前に異った形ですでに我々の経験したことのあるものであった。

浪漫主義的傾向は作家、社会、特に人間の生き方について、自己を忘れることなく考える。総合的な批評態度は本質的に浪漫的である。たとえ現代のそれが New Criticism の中から生れてきたものであるにせよである。アングロ・サクソンの二元的世界観の故に、英国浪漫主義が独仏のような統一感を与えないで、社会性と反社会性、宗教性と反宗教性、芸術と人生、伝統と反逆、正統とアウトサイダーの同時的存在によって成立しているような観を呈しているのも却って私の興味をそそるものである。

現代の批評は、古典主義にかえろうとしながら、いぜんとして浪漫主義的でもある。

私に与えられた Coleridge 以来の英国の詩論を語るという仕事は荷が重すぎるが、例えば New Criticism の中の浪漫的性格の無理からぬことでも暗示できれば幸いである。

.

C. M. Bowra は *The Romantic Imagination* のなかで浪漫主義者たちを、ルネサンス期の人々と同じように政治や芸術において改革の意気に燃え、外に向って発展し、単な